
美しき王は神父に傳く

神崎ミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しき王は神父に傳く

【Nコード】

N2457U

【作者名】

神崎ミア

【あらすじ】

ヴァンパイアが生活を脅かす仮想現代で、イギリス人の神父、クレイグはヴァンパイアの少女、シャルロットを引きつれ自分の過去に関わりがある一人のヴァンパイアを捜していた。その身に秘めた強大な力をクレイグに奪われたシャルロットはクレイグより力を奪取するべく行動を取っていたが、彼女もまた、とある目的を持っていた…。ヴァンパイアと人間の生き様を描いたファンタジー！

プロローグ

深夜、町は濃霧に覆われていた。ここ数年、この街ではこうして夜中になると濃霧が立ちこめ、朝方には晴れる。住民は部屋を締め切り、ベッドで眠りながら濃霧がおさまるのをひたすら待った。それがこの街では数十年も昔から慣わしのようにつながれているのだ。しかしながらそんな事を知らず、ふらふらと出歩く二人の旅人がいた。

一人は長身の青年で、目元が優しく、おっとりとした雰囲気を持った所謂、優男で、長い髪を一まとめにして背中に流している。そして隣の少女は一目見れば忘れられないほどの美少女で、その美しく整った顔は不満げな表情が乗せられていた。

「ひどいな。クレイグ、無事か？」

少女の大きな両の赤目がクレイグと呼ばれた隣の青年に向けられる。その瞳の美しさは、宝石の紅色を彷彿とさせるようだった。

クレイグはちらりと少女を一瞥して頷くと、ポケットからマッチを取り出した。火を灯した瞬間、マッチは瞬く間に巨大な炎へと変貌し、やがて持ち手まで燃やし尽くして灰となり、地面へと散った。

「どうやら…ヴァンパイアの瘴気のようなですね。」

「そうだろうよ。微かにだがね、血の臭いがする」

こつりこつりと二人が歩く音だけがしんと静まり返った街に響いた。住民は数十年前から夜に外に出歩くのを止めた為、外灯などは一切無い。さきほど燃やしたマッチが最後だったため、ランプは小さくなっただろうそくを残してぼんやりと闇に溶け込んでいる。

クレイグは少女に振り返り尋ねた。

「シャルロットさん、近いですか？」

「ああ、見たまえ」

少女、シャルロットは細い指先をピツと伸ばして一点を指す。

そこには暗くてよく見えなかったが、赤黒い何かが地面に散らばっていて、酷い悪臭から、人間の血であることが伺えた。

「食事した後みたいです…。」

「クレイグ、ランプと、我輩の力を少し返せ」

クレイグは、シャルロットに指示されたとおり、ランプを手渡して彼女が差し出した右手を握った。その瞬間、ランプにビビットピンの炎が燃え上がり、じんわりと地面を照らし始めた。

すると血が広がった先に、ぽつりぽつりと足跡が残っていた。

しかしそれは靴で歩いたとも、素足で歩いたとも取れぬもので、それを見るや否や、シャルロットは顔をしかめてその足跡を視線で追った。

「…どうやらコイツはもう長くないな…人型を保っていないようだ」
「本当ですね。まるで鶏の足跡みたいだ…」

「ヤツはすぐ近くにいます、クレイグ装弾は済んだか？」

「はい、既に教会で済ませました。おっちょこちよいのシャルロットさんとは違いますから」

「…お前、我輩が力を取り戻したら覚えているよ…」

クレイグを睨み上げ、一步シャルロットが踏み出した瞬間、ぐん、と目の前に圧力を感じてシャルロットは足を止めた。

鵬をも越すような俊敏さでクレイグを引っつかんで後退すると、

つい先ほどまでシャルロット達が立っていた地面が窪み、レンガがまるで紙のように散らばった。

「おいでましたね」

クレイグはホルスターから長身の拳銃を取り出す。純白の美しいフォルムのリボルバーは、濃霧の中でも、きらりと輝いていた。その中に込められた六発の銀の弾だけが、ヴァンパイアに傷をつけられるとされている。

クレイグはしっかりと狙って、暗闇で姿がまだ見えないヴァンパイアに目掛けて二発発砲する。

シャルロットは身軽にそれをかわして飛び上がると、銃弾を食らって怯んだヴァンパイアにかかと落としをお見舞いさせた。

すたっ、とシャルロットが地面に降り立ったのと同時に、巨体を地面に落としたヴァンパイアのうめき声が響き渡り、木々がほんの少し不安に煽られたようにざわめく。クレイグは銃を構えたまま、ヴァンパイアに歩み寄った。

「ひどい姿だ…本来美しい姿をしているはずのヴァンパイアが…」

鷲のような頭に、人間の血で染まった青い羽。不恰好に大きい体と澱んだ目は、物語に描かれるような怪物のようだった。

長く血を求めてこの街に居座っていたのだろっが、既に、人型を無くしてこの僅かな攻撃に反撃もできないようだった。

クレイグはグツとその鷲のような頭に銃口を突きつけて呟いた。

「アーメン」

パン！と弾けた頭が、瞬く間に真っ赤な花びらに変わってゆきヴァ

ンパイアはそのまま風に流されるようにして散っていった。
濡れた銃口をふき取り、クレイグはシャルロットに振り返った。

「今回のお仕事はこれでお仕舞いです。帰って飲みましようか」

「…解せんな…何故我輩の力を使わない？弱っていたとはいえ、銃弾を無駄にすることなくコイツを始末できただろくに、さつさと我輩の力に溺れろ、そして我輩に力を返せ！」

クレイグはふふつ、と小さく笑って返した。

「いえ、私はあなたの力を行使する時は私の命が危なくなつた時だけ、と決めているんです、ご心配なく。それからあんまりオイタを言つと、残り三発をシャルロットさんの脳天にプレゼントしますから氣をつけて下さいね」

「ぬううつつ我輩はヴァンパイアの頂点に君臨する、代469の王なのだぞ！人間ごときが銀の弾で我輩を殺せると思うなよ！」

「だから言っているんじゃないですか、さあ行きましょう」

踵を返したクレイグに、シャルロットは怒りを感じて地団駄を踏む。
風に飛ばされたかつての同胞が目の前を散っていき、霧はすっかりと晴れて街は静寂で穏やかな夜を取り戻していた。

第一章 シスターケイのお願い（前書き）

私が書く小説にはシスターケイという名前の女性が沢山出ますが全くの別人で、全く一緒な人、というパラレルが含まれていたりしますがまあ蛇足までに。

第一章 シスターケイのお願い

クレイグが住む借家はシャルロットと同居しているため、部屋数が多かった。朝、朝食を作るために階段を降りると、大家であるカギユレイ夫人がキッチンに立っていた。

クレイグは気だるげに服を調え、カギユレイ夫人を見遣る。

「おはようございます…どうかされたんですか…？お家賃は先日納入したはずですが…」

「おはよう、ダッシュウッドさん。ごめんなさいね、勝手に主人が今留守で手が空いていたものですから」

大きなお腹をたぶん、と揺らして豪快に笑んだカギユレイ夫人に、クレイグはため息一つ、慣れた様子でテレビをつけて窓から新聞紙を引っ張り出した。

「いいえ、助かりました。シャルロットさん起こしてきます」

「ああ、待って、ダッシュウッドさん」

取り出した新聞紙を片手に、部屋を出ようとしたクレイグを引き止めたカギユレイ夫人は、少し潜めた声で尋ねた。

「シャルロットちゃん、養子にされているってお伺いしましたけれど…もしよろしかったら私のお家に預ける気はありませんこと？」

クレイグは啞然としてカギユレイ夫人を見つめる。彼女にはもう家を出た長男と、まだ学校に通っている長女がいる。子供が恋しいわ

けでは無いとすれば、彼女は示している意味はたった一つしかない。クレイグは顔を赤くして反論した。

「私は聖職者ですよ！何をおっしゃるんですか！」

「いえ、でもねえ、独身の男性が屋根の一つした他人の子を預かっているっていうのも……」

「カギユレイ夫人、あなたは私を誤解していらっしやいます、大體、年もものすごく離れていますし、私は何度も繰り返しますが聖職者ですから！万が一も一応もしかしても絶対ありません！」

裏返った声を整えるように、咳払いをしたクレイグは、一度鋭くカギユレイ夫人を睨みつけると、つい落としてしまった新聞紙を拾い上げて椅子に腰掛けた。

「はあ、ではシャルロットさんを起こしてきて下さい……私は少し気持ち落ち着けます……」

「そう？じゃあ私が起こしてきますわ、ああ、朝食の支度は整っていますからダッシュウッドさんはお先にどうぞ」

はあ、と大きな夫人の背中を見送り、クレイグは新聞紙に視線を落とした。

シャルロットは並外れた美しさを持っているため、ああやって心配されたのだがクレイグが言うとおり、ヴァンパイアであるシャルロットとは何百と年が離れている上、この上なくヴァンパイアを憎んでいるクレイグはもっての外だった。

新聞の一面には、昨日討伐したヴァンパイアによって霧から救われた住民の姿が写されていて、クレイグは少し誇らしげに微笑む。

朝食を食べる前に、新聞のお供としてコーヒーを飲もうかと立ち上がった瞬間、玄関のブザーが鳴り響き、クレイグは足を止めた。

「クレイグ！」

ドアを開くと、自分の身長より小さな少年が快活な声で名を呼んだ。クレイグは意外な来訪者に驚き、部屋に招きいれた。

「ロベルトくん、こんな朝早くにどうかしましたか？」

少年、ロベルトはクレイグが所属する教団のヴァンパイアキラーで、年は離れていたもののクレイグとは友人同士だった。普段は仕事場と休日ぐらいいしか顔を合わせなかったため、彼からの訪問にクレイグは少し戸惑っていた。

「ごめん、実は仕事の依頼をされてさ。電話しようとしたんだけど俺、携帯ヴァンパイアに壊されてて…」

「教会の電話を借りればよかったのに…まあ、折角来たんですから、朝食どうですか？」

「ありがとう、まだ時間もあるしじゃあお言葉に甘えて！」

ロベルトが食卓につくころには、中々起きないシャルロットも眠そうな顔で降りてきて、狭い借家のダイニングは一気にすし詰め状態になり、カギユレイ夫人はロベルトの朝食を準備するためにキッチンへと戻っていった。

「諸君、いい朝だおはよう」

「シャルロットさん…下着姿で起きてこないでください。カギユレイ夫人に怒られませんでしたか？」

「うむ、叱られた。起きた早々喚き散らしおって…我輩は我輩の好

きに過ごすからとごり押してこのまま来たのだ。見れば、いつの間にやら面白いのがあることだし着替えている時間がもったいなかったのは正解みたいだな」

「ごめんシャルロットさん、何言っているのか分からないよ…牛乳飲んで目を覚まして？」

「口の減らんガキめ」

そう言いながらも寝ぼけたままのシャルロットはクレイグから牛乳を受け取り、黙って飲み干した。

ロベルトはそんなシャルロットに苦笑しながら、今回の指令が記された一枚の黒い封筒をクレイグに手渡した。

「ケイから。」

「ありがとうございます。」

ピツとペーパーナイフで封筒を切り取り、入っていた中身の紙に書かれた指令の一文を見つめ、クレイグは眉根を寄せた。渋い顔をして指令書を見つめるクレイグに、ロベルトは身を乗り出して指令書を覗き見る。そこにはたった一文、まず私の話を聞いて。とだけ書かれていた。

普段ならば行き先や駆逐するヴァンパイアの特徴が明記されているのだが、これではまるでお手紙のようで、ロベルトもクレイグと同じ表情になった。

「何だこれ？」

「どうやら、上層からの指令ではなく、ケイさん個人的なお願い…みたいですな」

「ケイが？」

思案するように指先を顎に持っていたクレイグをじっと見つめてい

たロベルトだったが、カギユレイ夫人が焼きたてのパンをバケツ
いっぱいにとってきた瞬間にはクレイグから視線が逸れた。

新しく牛乳をシャルロットに注いでやりながらカギユレイ夫人がク
レイグを見つめると、クレイグは指令書を疊んで脇に置いた。

「まあ、仕事の話は起きたシャルロットさんを交えて改めて。さ、
頂きましょうか」

じつとりと不審がるカギユレイ夫人の視線から逃れるように、神に
祈りを捧げたクレイグは、フォークの先を勢いよくベーコンに突き
刺した。

二話

通常、ヴァンパイアは朝に弱い。活動の主を夜に、夏や春は一際行動が制限されているため、ヴァンパイアキラーであるクレイグ達にとっても夏と春は仕事が多い。

今は秋の始めだったが、教会に寄せられる依頼は数多かった。クレイグ達が先日訪れた街ではヴァンパイアの駆除には多額の報酬が必要だったため、ああしてヴァンパイアが我が物顔で数十年と生きていられたが、こういった例は実に稀であった。

朝食を終え、支度を始めたクレイグを、シャルロットが呼び止める。

「クレイグ」

「はい、どうかされましたかシャルロットさん？」

「カギユレイ夫人に何を吹き込まれたかは知らんが、我輩は我輩。そうお前が流されることもないだろうが、我輩はこの家から出ないからな。お前と我輩は一心同体。離れることは出来ん。その体に我輩の力がある限り。」

釘を刺すように強い調子で告げ、シャルロットは二度ほど指先でクレイグの胸板を突いた。

ベビードール姿のシャルロットはそのまま大きくあくびを一つ、着替えるべく自室へと戻っていった。クレイグはシャルロットに少しだけ見透かされた心に動揺し、息を吐き出してそんなシャルロットの背中を見つめる。ヴァンパイアでありながら、陽の光も屈せず、血も欲することのない完全体の体を持つシャルロット。姿かたちは幼くひ弱そうな少女であってもやはりヴァンパイアの頂点、王の力

を持つ者なのだ。

そしてその力の殆どを預かるクレイグは、改めて強大な彼女の力を怖いと感じた。

「クレイグ、どうかしたのか？」

「……いいえ。お気になさらず」

淡々とした口調で返したクレイグは、そのままダイニングを出て自室へと戻った。

カギユレイ夫人は朝食後、渋ってはいたが一人で帰宅し、ロベルトは二人の支度が終わるまでとつけっぱなしのテレビを観賞し始めた。自室へ戻る際、隣同士の部屋であるシャルロットの部屋をノックしたクレイグは、ドアを開けずそのまま告げた。

「お着替え中済みません、今日のお仕事はケイさんからの依頼だそうです。この後教会に向かいます。先ほどお伝えするのを忘れていたので。」

やや間があり、ドア越しに返事があった。

「食事でロベルトと話してたのはそれか、分かった。我輩は支度に時間がかかる故、先に車で待っていたまえ」

「……はい」

クレイグは返事をする、数歩歩いて自室のドアを開いた。

硬いベッドと向かい合ったように設置された乱雑なテーブル。薄いカーテンが引かれた窓からはクレイグが住む街の路地裏が影を伸ばしていた。

クレイグはテーブルから一冊の本を取り出し、手に取る。

真紅の表紙にはシャルロット、と彫り込んであり、中身はぎつしりと見たこともない文字が刻まれている。これが彼女の能力の全て。この本を媒介にして力を引き出し、形上彼女を使役しているのだ。

クレイグはしばらくばらばらとその彼女の命ともいえる本を眺めていたが、やがて銃のホルスターと皮の紐で共に腰からぶら下げた。しっかりと固定したのを確認し、ホルスターから愛用のリボルバー、メイデンを取り出して中の清掃を始めた。一度分解して行うため、この作業には時間を要したが、シャルロットの支度はそれ以上に時間がかかるため問題は無かった。

そして三発だけ残っていた弾倉にもう三発新しい銀の弾を込め、今回はどんな依頼があるのか分からないため、通常の弾を込めたオートマチックの小型拳銃もホルスターに収納する。

メイデンの掃除を終え、すっと構えてみる。銃口付近が鈍く光っていて、いつもの調子で安全装置を外したり戻したりしながらグリップの感触を確かめる。この右手で何度もヴァンパイアを撃ってきたメイデン。教会で神父と認定されたその日にもらったたった一人の相棒だった。

暫くすると隣からドアが開く音がしたので、クレイグもメイデンをホルスターに収めて立ち上がった。

部屋をでると調度階段を降りてゆくシャルロットがクレイグに振り返った。

「何だね、まだ部屋にいたのか」

「ええ、銃の整備を。シャルロットさん、襟に髪を巻き込んでいますよ。」

立ち止まったシャルロットに前を向くよう指示して、クレイグはシャルロットの襟から髪の手を抜き取った。白銀に輝く柔らかい髪は、指先をあつさりと通り抜けてドレスに落ちてゆく。数度指で梳いてやっってからクレイグはシャルロットの背中を軽く叩いた。

「はい、これで大丈夫です」

そして振り返ったシャルロットはやんわりと触れられていた髪を摘まみ、はにかんだ笑顔を見せた。

「すまん」

その瞬間、クレイグはいつも通り胸に、罪悪感のようなものを感じた。つい先ほど、部屋越しにメイデンの銃口を向けていた先が、こんなに優しく微笑む少女だったとは思えないほど何気ない日常のコマ。

クレイグは眉一つ動かさず返した。

「いいえ、お構いなく」

車は教会の数十メートル手前でゆるやかに減速して停まった。教会に祈りを捧げにやってくる信者が停めた車で駐車場が埋まっている。今日は孤児の子供達への慈善活動もあったため一際車の台数が多かった。適当な場所に停めては罰金されてしまったため、ぐるりと

教会を一周して裏に駐車したクレイグは、先に降りてシャルロットが座っている側のドアを開いた。

「足元、なんだか濡れているから気をつけてくださいね」

「うげえっ、ゴミから出た汁じゃないか！おぶれ！こんな道歩くと我輩のブーツが汚れてしまっ！それとも汚れたブーツをお前が舐めるか？」

「だそうです、ロベルトくん頼みましたよ」

「ええっ！？オレツ？！」

教会裏のゴミ捨て場からあふれ出した生ゴミの汁にしかめっ面をしたシャルロットを、ロベルトは結局おぶっていかなくてはいけない羽目となって恨めしげにクレイグを見上げる。

クレイグはそんな二人にお構い無しに歩き出した。

体重は軽かったものの、抱き上げた瞬間やれスカート裾が汚れるだ、やれ抱かれ心地が悪いから持ち直せやらと注文をつけられ、ロベルトは嫌な顔をしながらもシャルロットの要望を聞いて高く腕を持ち上げながら歩き出す。その危なげな足取りは抱えられているシャルロットにまで伝わり、自分できちんと抱えていると命じたくせに、足を投げ出して暴れ始めた。

「やめるよっ、痛いっ、引っ掻くな！」

「だから身長低いヤツに抱っこされるのは嫌だというんだ！この汚水がない場所に着いたらさっさと降ろせ！」

「最初からそのつもりだよ！いてっ、蹴ったな！」

いっそ汚水がある場所で降ろしてやろうかとロベルトが屈んだ瞬間、ふふっ、と高い笑い声がして三人は声がした方向に振り返った。

「相変わらず仲がよろしいですね」

切れ長の目が印象的な細身の白いシスター服を身に纏った女性、彼女こそこの教会でヴァンパイアキラーのギルドを受け持つシスターケイだった。

両手に抱えていたゴミ袋を一度下ろすと、ケイはクレイグを見遣った。

「依頼、受けてくださるんですね…助かります。詳しいお話は教会の私の部屋でしましょう」

三話（前書き）

最初にご注意を…シャルロットは変態です。最初にこの作品を思い浮かべたときに、主人公はえげつない好青年と、変態の女の子にしようと思って考えたお話ですので、ロベルトはそんな二人にいいように使われる為に生まれました…。

三話

教会は、静かに祈りを捧げる信者と少し退屈そうにしている子供たちの小さな声だけが埋めていた。ケイの後に続き、クレイグ、ロベルト、シャルロットの順で歩いてゆき、聖堂の両脇に供えられている扉から通路を少し行けば、修道士の宿舎があった。

一番奥の部屋であるケイの部屋までもう少し歩いてゆき、彼女は三人を招きいれて手を洗いに洗面所へと向かった。女性の部屋であることを忘れてしまいそうなほど、彼女の部屋はシスターらしからぬ銃器で埋め尽くされている。一見、違和感はあるが、彼女はクレイグの使う銃を整備する腕の立つ整備士を兼ねていた。ギルドに教会の仕事、整備士と彼女は実に多忙である。

ぶら下がった散弾銃などを忌々しげに見上げたシャルロットは、無表情を貫くクレイグを見遣る。

先ほどから少し様子がおかしかったのは気がかりだったが、彼は時々癇癪を起こすことがあったので、今回もまた、それに似た苛立ちか何かなのだらうと、あまり気に留めないことにした。

暫くするとティーセットを抱えたケイが、笑顔で戻ってくる。

「お待たせしました。では、お話を。」

細く、つい目がゆくスリットから伸びた足を組みケイは紅茶をカップにそれぞれ注いだ。

「実は…今回の依頼は私から受けてもらうのですが構いませんか？」

「ええ、そうではないかと踏んでいました。何かあったのですか？」

「それが…甥の事で困ったことがあります…」

彼女には妹がいて、シスターである彼女が独身を貫く一方、妹は早くに結婚し、子を生していた。

その妹の子供のことで話があると切り出したケイは、待てない様子のシャルロットに紅茶を渡してやり、残りをそれぞれ分配して最後に自分の紅茶を淹れた。

「甥は今、9歳になるのですが…行方が知れないのです」

「えっ、行方不明…?!警察には連絡したんですか?」

「勿論、してはありますが…この件はもしかしたらヴァンパイアが絡んでいるかもしれないのです」

伏せた長い睫が、涙が出そうになるのを堪えているのか震えていた。クレイグは静かに彼女が続きを話すのを待ち、シャルロットは関心がなさそうに紅茶を飲んでいた。

「ここ最近、妹が住む街で頻繁にこうした失踪事件が相次いでいて同一犯だと考えるならばヴァンパイアが一番しつくりと来るものですから…まだその姿や瘴気などは見つかっていない為、警察どころかギルドも動くに動きません。姿があれば既に賞金をかけてギルドに委託するのですが…」

「なるほど、甥っ子さんは一刻を争いますし、懸命な判断です」

「受けて頂けますか?もちろん、報酬はご用意させていただきました…どうか甥を、助けてやってください…!」

深々と頭を下げたケイに、クレイグは少し驚きを感じていた。

いつもは冷静で嫌味の一つも言い合うような仲の彼女がこんな風に懇願するように頭を下げる姿は見たことがなかったからだ。それだけ、甥の安否を気遣っているのだらう、クレイグはそっとケイの肩を撫でた。

「お任せ下さい。任務は必ず遂行してみせますよ。」

「ありがとうございます…ロベルトさんもありがとうございます…お使いみたいな真似をさせてしまつて」

「いや、いいよ。それより俺もクレイグ達を手伝っていいかな？俺もケイには世話になつてるし」

善意の申し出をするロベルトを、ふっと隣に座っていたシャルロットが嘲笑する。

「全くお前は相変わらず甘い奴だな、クレイグの奴は守銭奴だからこの依頼を受けているんだぞ、分かっているのかお前は」

「シャルロットさん、人聞きの悪いこと言わないで下さい」

「何だよお前はいちいち突つかかつてくる奴だなあ！」

「お前をからかうのが我輩の今の生き甲斐だからな、おらおら！」

そついいながらシャルロットは怒るロベルトの体をいやらしく触りながら高笑いを浮かべる。すっかり慣れているケイとクレイグは止めもしないし、何の反応もしなかったが、ロベルトは絶叫しながら必死に抵抗していた。

しかしその内硬かったケイの表情も少し和らぎ、その顔には笑みが戻っていた。

四話

ケイから彼女の妹が住む街の地図を預かったクレイグは、出された紅茶を飲み干して席を立った。

まだ紅茶を飲んでいる最中のシャルロットはクレイグを一瞥し、ロベルトが立ち上がったてもまだ優雅にお茶を楽しみ、ややあつてようやく立ち上がる。マイペースな彼女に慣れている二人はその間に地図で位置を確認していた。

「ここからさほど遠くありませんね…。今から行けば夜には着けるでしょうし好都合です」

「じゃあ俺、武器を持ってないから教会のを借りていてもいいかな？」

「構いません。好きな銃をお選びください」

同行する予定ではなかったため、自宅に武器を置いたままにしていたロベルトは、ケイに礼を述べて自分に合いそうな銃を探し始めた。彼女の造る銃はどれも質がよく、クレイグが愛するメイデンも彼女によるものだった。適当に小型のオートマチック拳銃を手に取り、握り具合などを確かめるロベルトを尻目に、シャルロットはクレイグの腰に巻きつけられた自身の能力の塊の本を見て笑んだ。

「ロベルトが銃を持つ必要はなからう。いつもは所持していない我輩の聖書を持ち歩いているではないか」

クレイグはシャルロットを見ず返した。

「ええ。今月の支給される銀の弾の数が規定量を超えましたからね。

「お前は力がありながら我輩を使役しないから銀の弾を使いすぎるのよ。もう少し柔らかく考えたまえ」

教会から支給される銀の弾はその貴重さ故に制限がある。

教会が定めるランクのヴァンパイアキラーによってその個数は変わるが、クレイグが月に支給されるのはメイデンの六発分入った木箱の12箱分。つまり七十二発分しか支給されず、他のヴァンパイアハンターは効率よくヴァンパイアを駆逐するために銃は使用しない。

ロベルトは選んだ銃に合う銀の弾丸をケイから受け取り、装填した。

「お前ら、喧嘩ばかりしてんじゃねーよ。ほら、クレイグの弾。」

今月最後の支給となる銀の弾が入った木箱をクレイグに押し付け、ロベルトは呆れたように二人を見遣った。互いに、同じ家に同居して仕事を毎日こなすわりには全く打ち解けない二人が、ロベルトは不思議にすら思えてならない。それだけ、距離を作っているのは勿論クレイグで、彼がどれほどヴァンパイアを憎んでいるのかがよく知れた。

しかしロベルトはそんなクレイグが何故ヴァンパイアの少女を従えているのか分からなかった。

「ありがとうございます、それに、別に喧嘩なんてしてませんよ。ねえ、シャルロットさん？」

「そうだ、我輩は寛容だからこんなガキの癪癪ぐらい許してやっている」

「癪癪なんて起こしてませんが」

ケイの部屋から出たクレイグは、見送りに出たケイに一度振り返り、

笑顔を向ける。

「そんな顔なさらないで下さい。必ず、あなたの甥を捜してきますから」

「クレイグさん…、ありがとうございます」

背中を向けたクレイグ、振り返って手を振るロベルト。退屈そうにあくびをするシャルロットに深々と頭を下げてケイは胸元の十字架を握った。

何か胸の奥に不安が残るような気がして…。

少年、ハンスは夜目が効く少年だった。

ハンスが目覚めると、そこは薄暗く妙に異臭がする部屋だった。周りを取り囲むようにして黴臭い本がぎっしり詰まった本棚、そして怪しげな文字が沢山刻まれた壁。いくつもそれらにはシミがあり、小さくオレンジ色に光る電灯がさらに不気味さを醸し出していた。痛む体を起こすと、直線に見える三段ほどの細長い階段と、直接階段の上には老朽化したドアがついていて、窓などは一切ない。試しにドアノブをひねってみたが、やはり動かなかった。

一体自分はどうしてこんな部屋にいるのか、記憶を辿ってみると、それは彼が学校から下校する時間まで遡る。

友達の少ないハンスは、墓守をする母レゼーナと営業マンの父グレスセルの三人家族で、小さな街に住んでいた。彼の父は仕事の関係上家を空けることが多く、レゼーナは月に数度墓守の仕事で家を丸々空けてゆく。幼い頃から一人でいることが多かったハンスは、学校のバスから降りると決まって家には帰らず擬似的な寄り道のようなものをして寂しい心をごまかしていた。

バスは規則的にハンスを家の前で降ろしてくれたが、ハンスはバスが行くと鞆を投げ捨ててふらふらと公園へと行く。ガレージに置いてあるボールをネットに入れて肩に担ぎ、靴を履き替え、歩き出す。公園まで行く中でも自分でルールのようなものを作ったりして、公園に着けば一人で遊び、母が帰る前に家に戻る。母が家にいても、友達と遊ぶと行ってこうして公園に一人でいた。

そう、その公園で、ある男と出会ったのだ。

「君は…いつもこの公園にいるけど…、一人なのかい？」

「そうだけど、オジサン誰？」

「私は、君に友達を作ってあげたいんだ。なあ、興味ないか？」

「友達を作る？」

男はどこか暗い表情をしていたが、その時ばかりは嬉しそうに口元を歪ませこう言った。

「そう、魔族の友達だよ…」

それから気づけば意識を失い、ここに倒れていたのだ。つまりこの部屋は男の家だと考えられた。

変質者には気をつけろと常日頃レゼーナに言われていたにも関わらず、嘘までついて寄り道ごっこをしていた自分を、ハンスは後悔していた。

ドンドンとドアを叩くが反応はないし、自分はこれからどうなってしまうのだろうと考えると涙が出た。そういえばレゼーナが言っていた。夜にはヴァンパイアが出る。そしてヴァンパイアはとも口が達者で、出会ってしまったら最後なのだと。

ハンスはもう絶望的とも取れる自分の行く末を憂いてさらに激しく嗚咽を繰り返して泣き崩れた。

もう二度と母の言いつけは破らないと、既に遅い誓いを繰り返しながら。

五話

街に到着した三人は、まずは街の住人に聞き込みを開始するべく、ケイから預かった甥のハンスの写真を見せて回った。元々友達も少ない子だった為、大人に聞いてもいまひとつの感触が得られなかったが、小さな公園に差し掛かり、遊んでいた少年に見せるとようやく有力な情報が得られた。

「ハンスの事？最近、行方不明なんだろ？」

「でもさ、誰も心配してないよ、あいつ友達いないんだ」

「…御託はいい、この少年について知っていることを述べたまえ」

数人の少年に食って掛かるシャルロットを押しつけ、クレイグは柔らかに言い直した。

「ハンスくん、いつ頃から来なくなっただとか…最後に見たのはいつだったとか教えてくれないかな？」

「オジサン警察？」

「私は教会所属する神父、諸事情があつてこの少年の行方を追っているんだ」

「まあ、ハンスの事だからどうでもいいけど、俺たち最後にハンスを見たのはスクールバスでだぜ」

「スクールバス…」

クレイグは胸ポケットから小さなノートを取り出し、少年達の証言をメモ始めた。

一方協力したのにも関わらず足蹴にされたシャルロットは不服そうにクレイグの背中を見つめながら、ヴァンパイアが放つ瘴気の臭い

嗅ぎ別けていた。

だがシャルロットの鼻を持ってしてもそれは感知できず、おおよそこの街にはヴァンパイアは潜んでいないだろうと伺えるほど。

今回の誘拐も本当にヴァンパイアが関連しているのかまだ知れておらず、シャルロットはその辺りにきな臭さを感じていた。

「そうか…それで、彼はいつもどこに行くかとか…君達は知っているかな？」

少年達は顔を見合わせる。さすがに友達でもなさそうだし、知っていないのかと思えば、一人の少年が人差し指を地面に向けてクレイグを見つめた。

「ここ」

「えっ？」

「あいつ、この公園で一人で遊んでたんだ」

クレイグはシャルロットに振り返る。シャルロットは面倒そうに首を振り、二人は一つの確信を得た。

ハンス少年はここで誘拐されたのだと。

時間も分からない部屋で一人、どうにか唯一の出口であるドアから脱出しようと試みたハンスだったが、どうにもドアは開かない。何かで押さえつけているのだろう、少年どころか大人の男でさえ苦戦するようなドアの硬さに、ハンスは脱力して不気味な部屋を見渡す。

異臭もするし、何だか肌寒い。男はどうして自分を誘拐したのか、その目的は何一つ浮かばないし、先ほど泣いた為か空腹がハンスの腹を刺激する。

ふと、もたれかかっていたドアから足音が聞こえる。拘束こそされていなかったが、何だかここにいるのはまずい気がして、ハンスは急いで立ち上がって元居た場所まで走っていった。やがて足音は大きくなり、ドアの支えを取る音と共に、ドアが開いた。

ハンスは息を飲み、出来るだけ離れるように後ずさりをした。

「目が覚めたかい？」

改めて、公園で見た男を目にしたハンスはその男の異常にまず気がついた。目の焦点がどことなく合っていない。まるでこの世界を見つめてないような濁った大きな目、全体的にやせ細った体。まるで骸骨だ、ハンスはそう思っただけで体の震えが止まらない。

男は静かにハンスに歩み寄ると、震えるハンスの頭を撫で、その上からなにやら生臭い液体を体にかかるように満遍なく振り掛ける。動物の腐ったような臭いがして、ハンスは思わず吐き気に襲われて体を屈めた。

「大丈夫、大丈夫…魔族の友達を作っただけだよ、一人で寂しかった

ただろう？それも…とっておきの魔族だ…」

「オジサンはどうしてこんな事をするの…？家に帰りたい…友達なんていないから…家に帰して」

「ダメだよ、オジサンだけじゃあ友達は喚べないんだ、いい子だからここに居るんだ」

「…帰りたい、帰りたいよ」

「…この世界を憎んだことはないかい？」

「えっ？」

男は少年が怖がらないように優しい声音で繰り返す。

「この世界でなければ、自分は輝かしい未来があると…思ったことはないかい？」

「それは…」

「オジサンが叶えてあげよう…そして君の友達を作ってあげる、最高の友達だ、名前は…」

ドロツとハンスの顔に、男が撒いた液体が雪崩れ込み、男はそれをほんの少し拭ってやりながら恍惚としてその名前を囁いた。

「吸血鬼…シャルロット…」

六話

クレイグは、少年達に礼を述べて苦しげな表情を取っていた。それはシャルロットにしてみれば面白くない話したが、彼は今、シャルロットを使役するべきかどうかを悩んでいるのだ。それは長年一緒にいたロベルトにも分かったのか、深いため息と共に、ロベルトの指先はクレイグの腰の本へと伸びた。

「あのさ、クレイグ。お前がこいつの力に慎重になるのは分かるけど。正式な契約を済ませた魔族は契約者に逆らうことはできない。使役した所で暴発するような能力でもないし、使ってやれよ」

「や…、やめてください！」

本を取り上げたロベルトに目を剥いたクレイグだったが、それは正論とばかりにシャルロットがロベルトの前に阻んだ。クレイグは滅多に崩さない表情を怒りに染め、シャルロットの肩を掴んで脇にかけた。

「怖いのだろう」

シャルロットは、クレイグに尋ねた。

クレイグは途端、動きを止めてシャルロットに振り返らず尋ね返す。

「…何がです」

「これ以上、失い続けることにお前が恐怖を抱いていると言っているんだ。いいかね、我輩の力はお前の制御次第でどうとでもなるのだ。それをお前が一方的に恐れ、離し、使役しない…。我輩の力がこれ以上弱まればお前だって」

「…失うものは一通り、全て失いました、貴女に何が分かるんですか…言われずとも今回は力を使うつもりです、返して下さいロベルトくん」

返して、と言っではいるが強引に本を奪い返したクレイグは、紐を解いて真紅の本をパラパラと開いた。

『千里眼』

カツ、と本が閃光に包まれ、クレイグは一度目を閉じる。

素早く様々なものが駆け巡り、クレイグの視界は薄暗い一室で止まった。そこに、震えた少年がいる。場所は特定できたものの、クレイグは心が晴れず、千里眼を解いてすぐさま本を閉じた。

「この先の住宅街の家です、車で向かいましょう」

ロベルトはいたたまれないような気持ちで、怒っているクレイグの背中を見つめていたが、シャルロットはそんなロベルトの肩を叩いてやんわりと微笑んだ。

「気に病むな。お前はお前なりにしてくれたことぐらい、あの癩癪坊やにも伝わっている。それにアレはいつものかんしゃく、だ。」

フツと最後に意味深な笑みを浮かべて過ぎ去ったシャルロットに、ロベルトもやや頬を緩ませて二人のあとをようやく追いかけた。

住宅街へはあの公園からはすぐだった。誘拐犯がいるであろう自宅前に立ったときには引き締まった思いがしたが、クレイグは冷静にインターフォンを鳴らし、なるべく平静を装って声を掛けた。

「すみません、教会の者ですが」

勿論、返事はない。だがガレージには車が一台、シャッターが開いた状態で停まっついていて誰かがいるような気配は感じられる。そして何より確証があるのはその両目でしっかりと現状を見つめたクレイグ自身だった。

「すみませんえつと…ブルーメさん…ですよね？教会の者ですが少しお話を…」

「おいクレイグ…あのガレージから…妙な気配がする…」

「えっ、あ、ちょっとシャルロットさん！」

ふらつ、とシャルロットはガレージに惹かれ歩き出す。

昔感じたことのある、不穏な気配。ガレージは近づくに連れて悪臭が鼻をついた。シャルロットはある確証を得て、クレイグに振り返る。

「おい、急ぎたまえ…このガレージの地下でどうやら魔族を呼び出す儀式をしているぞ」

「えっ、本当かよ！？シャルロット…！」

「ああ、しかもあの少年を生け贄にしてな」

シャルロットはガレージにたどり着くと、隣に駆けつけてきたクレイグの右手を無理やり握り、片方の空いた手でピンク色の炎を出し、ガレージのドアを焼いた。

あまりに咄嗟の事で言葉もでなかったクレイグだったが、シャルロットの炎はドアを焼き尽くし、燻った炎ごとドアを蹴り破り、シャルロットは右手を引いたままガレージを降りて行った。

「ひどく…嫌な臭いだなクレイグ…これが我輩達を構成しているもののだとは…考えたくもないな…」

「……ええ、そうですね…」

「あ、おいっ、お前ら俺を置いてくなばかーっ！」

人間的な発言もするのかそれとも偽りか、そう心の中で呟いたクレイグは、ずっと握られたままの小さな手の平を見つめてため息をついた。

七話

階段を数歩、また数歩と歩くと、悪臭はより酷いものとなっていた。

クレイグとシャルロットは慣れているとでもいったように涼しい顔をしていたが、その背後にいたロベルトは顔に目一杯シワを寄せて鼻をつまんでいた。息をするのも苦しいほどの悪臭だ。

クレイグは階段から真つ直ぐ伸びた先にある一枚のドアが、数センチ開いているのを見てそつと手のひらで押し、中の様子を確認した。薄暗い室内。湿気の高い室内はオレンジの淡い光の中、異様な雰囲気包まれている。

クレイグはその部屋の中心で、少年が倒れているのに気がつき、駆けつける。抱き起こせばそれは間違いなくケイの甥である、ハンスだった。

「ハンスくん、しっかりしてください、ハンスくん！」

体には腐った動物の血液がかけられていて、苦しげに呻く唇は青ざめている。ここから一刻も早く助け出さなければ命の危険があるほどだった。クレイグは険しい表情でロベルトに振り返った。

「ロベルトくん、私の腰のポーチから聖水を」
「わかった」

ロベルトはクレイグの隣にしゃがみ込み、ポーチの蓋を開いて数本、聖水の瓶を取り出した。

それを受け取ったクレイグは、自分の服の裾でハンスの体を拭いて

やりながら数滴づつ、体に聖水を振りまいてゆく。

一方、大人しくその治療を眺めていたシャルロットは、何者かの気配を感じ、急に背筋を伸ばしてガレージのドアを睨んだ。

何の音もしなかった為、治療に専念している二人には気づかれていないようだったが、静かにドアが開き、一人の男が姿を現した。

「その方に触れるな、卑しい人間が！」

男が開口一番、そう叫び、男の存在に気づいていなかった二人は驚き振り返る。

シャルロットは男の貧相な姿に眉を寄せて、腕を組む。

男は目深のフードのコートを羽織っていながらもその体型がよくわかるほどやせ細っており、歩くのが限界であるといった風体で手すりにしがみついている。

その姿からして、彼が違法な方法で魔族と関わろうとしていたのを理解し、シャルロットは口を開いた。

「お前、禁術使いだな。本来コイツのような教会の認可なしに魔族を喚ぶつもりだったか」

「ブルーメさんですね？私は教会の者です。行方不明の彼を探しにやってきました、一緒に審問官の所まで行きましょう」

クレイグは悲しそうに首を振り、ハンスをロベルトに預けて男、ブルーメに歩み寄った。

表情は伺えなかったが、ブルーメは怯えたようにおぼつかない足で後ずさりして、手近の棒を振り回す。シャルロットはその粗い攻撃がクレイグに当たらないよう、クレイグの前に立ちはだかった。

「一体、何を喚ぼうとした？言え」

「ははは…たわ言を…もう喚んで…ある」

ブルーメの濁った両目が、シャルロット、クレイグへとゆっくり向けられ、ブルーメは最後にハンスを見遣った。ハンスは依然としてロベルトの腕の中で苦しそうにもがいていたが、突然ブルーメが視線を超越した瞬間、それはぴたりとおさまり、ハンスはロベルトの腕を乱暴に突き放し、立ち上がった。

ロベルトは急に呼吸が正常なものへと落ち着いたハンスに、不気味さを感じてハンスを見上げる。

先ほどまで苦しんでいたのがまるで演技だったとも言つように、ハンスは薄く目を開いて長く、息を吐き出した。

「…いかん…！クレイグ、下がってる！」

咄嗟に、ハンスの様子がおかしい事を悟ったシャルロットは、クレイグをドアの元まで押すとハンスに駆け寄った。

強い力で押されたクレイグは大きくドアに背中を打ちつけ、痛みに小さく悲鳴を上げてシャルロットを見つめる。

そしてそれはほんの数秒間の出来事。

次の瞬間にはシャルロットの全身を淡い赤い光が包み込み、シャルロットは断末魔だとも思える絶叫をしてその場に倒れこんだ。

「一体…何が?!」

シャルロットの体を薄い煙が包み込み、ハンスは舌打ちをすると掲げた右手を戻し、シャルロットを見下ろした。

『…魔族か』

声は、少年のものとは思えないほど低かった。それはまるで、地の

底からじんわりと広がるような澱んだ声。ただ純粹な恐怖を植えつけるようなその声音に、ロベルトは知らず、体が震えているのを感じた。

ブルームは一人、そんなハンスを見つめて恍惚とため息が漏れるように息を吐き、
そのままハンスに向かい、声を掛けた。

「漸くあなた様とお会いできた…吸血王…！」
「えっ！？」

ロベルトはブルームに振り返り、もう一度ハンスを見上げる。それは確かにシャルロットではなく、ハンスに向けられている言葉だった。

シャルロットは体が焼きつくような痛みに耐えながらくつくつと笑ってみせる。

「吸血王…？お前がか？」

ハンスは何も答えず、ただ黙ってシャルロットを見下ろしていた。クレイグはよろよると立ち上がるとシャルロットの傍まで行き、ホルスターからメイデンを抜き取り、ハンスに向ける。

その体は確かにハンスのものであるのに、纏う雰囲気はもはや、ただの少年が持っているものではなかった。

銃口は一般人に向けているという意識がある為か、僅かに震えている。

「貴様は…何者だ？ヴァンパイアなのか…？」

ハンスは尚も答えない。

ブルームは一瞬の静寂の後、気が狂ったかのように甲高い笑い声を響かせ、ぐっ、とクレイグの胸元を掴むとフードの奥から焦点の合わない目でクレイグを睨みつけた。

「吸血王も知らないのか、今我々の世界を席捲しているのはヴァンパイアだ。その全てを統括なさっている王、シャルロット様も知らないのか！」

「ハン、笑えんな。」

クレイグの喉を締め上げるブルームの手を払い、シャルロットはロボロの体で立ち上がる。

弾かれた拍子にフードがはぐれたブルームはシャルロットを見つめ、薄ら笑みを浮かべた。

「シャルロット様…皆殺しにして下さい…こやつらは皆…敵です」

「教えてやれ、クレイグこいつに我輩が何者か」

胸元を掴まれた反動で、メイデンを取り落としていたクレイグは、シャルロットを一瞥し、腰からぶら下げていた本に触れた。

眼前の少年は友人であるケイの甥。たとえメイデンで扱えたとしても、その体には深い傷が残ってしまう。

少しの間、周りの音が掻き消える程目を閉じ、慎重に考えたクレイグは、決心したかのように勢いよく皮ひもを解き、本を開いた。

「この名において戒められし異界の者に、名を与えよう」

バラバラっ、と本が数ページ開くと眩いほどのピンク色の光が真紅色の本を包み込み、よく通るクレイグの声が、名を呼んだ。

「シャルロット」

ブルームが反応するより早く、シャルロットはクレイグに静かに傳くと、その手にキスをして立ち上がる。

黄金を織り交ぜた蜜色の髪がゆらりとたなびき、本を開く前とは別人のように、シャルロットは少女から女性へと変貌してブルームに対峙した。体の傷も癒え、美しくその唇に弧を描いたシャルロットはブルームを乱暴に引っつかみ、告げる。

「我輩が本物の代469吸血王、シャルロットだ、よくその目に焼き付けておけよっ！」

ぐん、と拳に力を込め、シャルロットはブルームを殴りつけて床に落とす。

すっかりその一撃で気絶してしまったブルームに、クレイグは不安げな表情を乗せてシャルロットの背後から覗き込んだ。

「何をしてるんですか、死んだらどうするんです！」

「殴ったぐらいでは死なん、うるさいなお前も…さて…」

一番の目的であるハンスは、特に何と言葉を掛けることなくその様子を眺めていた。

シャルロットは首を軽く傾げて、ハンスに向き合う。

「お前は一体何者だ？もう術者の意図から離れているはずなのに何故動いている？それに我輩にあんな痛い思いをさせてくれるとはな

…」

『深淵』

「ん？」

ハンスはゆつくりと唇を動かし、シャルロットを見据える。

シャルロットは小さく呟かれたその一言を聞き返すように眉根を寄せたが、ハンスはそのまま言葉を続ける。

『我は…深淵…世界の秩序の安寧を遵守する…名を…』

その言葉一つ一つは、気をつけていなければ聞き取れないものだった。だがその言葉一つ一つが、脳内を直接揺さ振るような恐怖感を与える重みがあった。

シャルロットはともかく、背後にいたロベルトやクレイグはすっかりハンスの言葉に飲まれてしまっていた。

『アヴィス…』

バツ、と背中から二対の翼が広がり、ハンスはゆつくりと浮上する。シャルロットは漸く、ハンスの体を取り戻そうと、彼の全身をピンク色の炎で包んだが、それはあっけなく消失。

掻き消えた炎が宙を飛び散り、部屋にはピンク色の炎がぐるりと広がってゆき、シャルロットは慌てて炎を霧散させた。

「待て！その少年の体を返せ…！」

シャルロットがそう叫ぶのも虚しく、つよい風が小さな部屋いつぱいに巻きおこり、思わずクレイグの体を守るために伏せたシャルロットはそのまま頭上をハンスが飛び去ってゆくのを見つけて声を上げる。

「待て…！ケイの…！」

無数の純白の羽根が部屋に舞い散り、シャルロットは力の効力をな

くして元の少女の体へと変えてしまった。うずくまったままのクレイグは力を使い憔悴しており、シャルロットは悔しさから唇に血が滲む。

何も出来なかったロベルトもまた、悔しげな表情をしたまま、床に落ちた羽根を拾い上げる。その純白な羽根はまるで、

「天使みたいだ…」

そう、呟いて。

第二章 暗中模索（前書き）

厨2 臭いのはデフォルトです

第二章 暗中模索

ドア越しに聞こえる嗚咽ごと塞ぐように、クレイグは静かにドアを閉めた。

ハンスの奪還に失敗した旨、ハンスの体を使うアヴィスという魔族。全てをありのまま、ケイに伝えた後、クレイグは泣き崩れてしまったケイを抱きしめてやることも出来ず、一人、部屋を出てきた。

シャルロットは仕方ないだろう、といった表情で首を振り、俯いたままのロベルトの腕を乱暴に組み、クレイグをそのままに歩き出した。

どんな想いでケイがハンスの搜索という依頼を出したのだろうか、その心中の全ては推し量らずとも知れた。ハンスは元々気が弱く、友達が少ない。

叔母であるケイもそのことをいつも気にかけていたし、失踪する以前にも、ハンスのことはよく耳にしていた。背後から聞こえるケイの泣き声は、クレイグの全身を貫くように頭に響き渡る。

冷たいメイデンの感触に少し目を見開き、クレイグは二人の後を追うようにゆっくりと歩き出した。

この銃を渡されたあの時に似た、罪悪感を抱きながら。

「こうなつては、ハンスを捜すよりあるまい。我輩の力を使えばまた追えるはずだ」

クレイグの自宅であるアパートに戻ってきた三人は、玄関先で顔を見合わせながら立ち止まって話をしていた。シャルロットはアパートのドアにもたれ掛かりながらそう告げ、クレイグはそのシャルロットの言葉に嫌な表情をした。今日は既に力を使って、体はボロボロ。

本来使いたくない力をケイとハンスの為ならばと使ってきていたが、依然として力そのものの嫌悪感は拭えなかった。そんなクレイグの気持ちを悟ってか、ロベルトがシャルロットに口を挟んだ。

「でもさ、今日はもうやめておかないか？お互いに気持ちの整理とかしたいだろうし…クレイグも疲れてるって。なあ、俺今日泊まってるっていいか？」

「構いませんよ」

「おい、ロベルトお前…」

「シャルロットも、疲れただろ、あんな叫んでたんだし痛かっただろ。もう休めよ。終わり、何ももうしないって言ってるんじゃないんだから」

不機嫌に頬を膨らませたシャルロットの背中を押し、ドアを開いたロベルトはそのままクレイグのアパートに入ってしまった。まだ立ち尽くしていたクレイグに振り返り、ロベルトは薄く笑んだ。

「おいおい、家主が居ないのはおかしいだろ、早く入れよクレイグ」
「え…、ええ。今行きます」

彼なりに、気を回してくれているのだ。漸く気づいてクレイグも弱弱しく微笑み返した。

ハンスの体に乗っ取ったアヴィスという謎の魔族。その存在はシャルロットにもわからないという。クレイグは明日、どうしても会わなければならないと確信している人物を頭に思い描いた。

そのアヴィスを召喚したであろう男、ブルームの存在を。

「聞いた？お姉さま」

少女が一人、肉感的な美女の体をなまめかしく撫でながら耳元で尋ねる。美女の方は別段、彼女の行動を咎めるわけでも受け入れるわけでもなく、顔を上げて尋ね返した。

「何を？」

「お兄様が人間界にようやく降り立ったって…ベルゼブブが言ったの私、お兄様にお会いできなくて寂しい」

「あら、私がいるじゃない」

「うふふ、それもそうなのだけど」

少女は嬉しそうに美女の髪に顔を埋めて甘えるそぶりをしていたが、やがて急に態度を変えて一言呟いた。

「でも…そんなお兄様の寵愛を受けてるあの女、気に入らないわ」

「だあれ？」

「シャルロット…あいつ、人間界にいるんですって」

くるん、とウエーブがかかったロングの髪を弄びながら、美女はその端正な顔に相応しく、美しく微笑んだ。

「ふふ、本当にあなたは嫉妬深いわね、レヴィアタン」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2457u/>

美しき王は神父に傳く

2011年11月16日14時20分発行